



札幌西支部

中川 雄介

Yusuke Nakagawa

鉄道が好きである。いわゆる鉄男、鉄ちゃんである。

最近、多くの鉄子（女性の鉄道ファン）が出現してきている。そのせいか、鉄道は、男女問わず楽しむことのできる趣味として、市民権を得てきたような気がする。誠に喜ばしい限りである。いい世の中になったものである。

一昔前は違っていた。鉄道ファンというと、男性の専売特許のような観があった。

男の子は、たいてい鉄道が好きである。ただ、その大半は、成長するにつれて、鉄道を卒業する。悲しい大人になってしまう。一方で、大人になっても少年の心を持ち続けている人たちがいる。鉄道を愛し続けている人たちがいる。鉄道ファンは純粋なのである。繊細で傷つきやすいのである。悪い人はいない（はずである）。

鉄道ファンには、いくつかの類型がある。専門分野といってもよい。代表的なものとしては、乗り鉄、撮り鉄、模型鉄、時刻表鉄、スジ鉄、駅弁鉄、収集鉄などである。最近、廃線跡専攻や秘境駅専攻、廃車専攻など、専門分野がさらに細分化してきているようである。

私は、もっぱら乗り鉄である。スマートフォンを手にしてからは、一般客の迷惑にならない範囲で車両を撮影するようになった。着信メロディも、山手線の駅メロディにしている。

私の乗り鉄としての歴史は古い。小学生の時には、旭川の親戚の家まで、札幌から各駅停車に乗っていった。特急に乗ってしまうと、あっという間に鉄道の旅が終わってしまうからである。結局、旭川まで3時間以上かかったが、幸福感でいっぱいであった。

今でも、出張の際には、できるだけ鉄道で移動する。出張前日には、ワクワクしてしまう。時刻表を入念に読み込んで、イメージトレーニングを行う。ダイヤグラムも調べて、乗車する列車のスピード感も把握しておく、完璧である。

そんな乗り鉄専門だった私が、最近、新分野を研究し始めた。呑み鉄である。

きっかけは、『六角精児の呑み鉄本線・日本旅』というテレビ番組である。俳優の六角精児が、ひたすら酒を飲みながら鉄道に乗って旅をするという番組である。壇蜜がセクシーな声で、語り役を務めている。

とても素敵な番組である。鉄道、酒、セクシーな女性。大好きなもののばかりである。この番組に影響されて、私も遅ればせながら、呑み鉄デビューを果たした次第である。

呑み鉄には、特急はダメである。快速もイマイチである。各駅停車こそが好ましい。各駅停車に揺られながら、まずビールを空ける。車窓に海が広がったならば、ややアルコール強めの酎ハイに進みたい。ハイボールも悪くない。列車が森に入ったならば、かねて用意しておいたウイスキーの小瓶を取り出す。森とウイスキー、間違いない組み合わせである。

そうこうしていると、列車の揺れ以上に、車窓が揺れてくる。イイ具合にアルコールがまわってきた証拠である。ここでは、自然の摂理に従い、ひと眠りしたい。レールのジョイント音を子守歌にしながらまどろむ。至福である。極みである。

しばしのまどろみの後、目覚めると日が傾いている。鉄道の旅も終盤である。序盤とは趣が変わってくる。過ぎ去りし日々思いをはせるようになる。妙にもの悲しくなってくる。

さあ、舞台は整った。満を持して、日本酒の登場である。ただ、小瓶の日本酒ではダメなのである。呑み鉄にふさわしいのは、やはりカップ酒である。列車の揺れに気を付けながら、慎重にカップ酒のフタを開ける。至高の瞬間である。少しこぼれてしまい、あわてて口をつける。想像するだけでめまいがする。

まだまだ研究中ではあるが、これが私の呑み鉄スタイルである。

最後に、重大な問題に触れたい。北海道の鉄道の行く末である。多くの路線が、JR単独では維持困難であるという現状。なんとか鉄道を残すことはできないものか。北海道の開拓は、鉄道と共にあった。守り抜いていきたいものである。



JR札幌駅にて



近鉄名古屋駅にて